

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第17回 第5.5.2節～第5.5.4節

2018年9月1日

小田 勝

147頁「5.5.2 直接経験・間接経験について」。(2)の細江逸記の引用の2行目、「告げるに」は「告げるのに」の誤記であった(細江逸紀1932:119-120)。147頁下の◆について、次の記事も、同趣のものである。

- ・さて勅撰にも打聞にも、撰者の歌の事書きには、「いかなる時詠み侍りし」と「し」の字を必ず置くべきなり。余の歌の事書きには、「いかなる時詠み侍りける」と「ける」の字を置くべきなり。この習事ゆゆしきけぢめなるべし。(愚秘抄)
- 「き」と「けり」の使い分けについては、よく分からない。たしかに、148頁用例(3)や、次のような例では、「き」が直接経験、「けり」が間接経験と考えてよく当たる。
- ・崇徳院の御位の時、長承のころとか、かかるためし(=飢饉)ありけりと聞けど、その世のありさまは知らず、[養和ノ飢饉ハ]まのあたりめづらかなりしことなり。(方丈記)

しかし、次例では、伝聞表現とともに「き」が用いられている。

- ・あはれ昔へありきてふ人磨こそはうれしけれ(古今1003)〈「昔へ」ハ「いにしへ」カラノ類推デ出来タ語カ〉
- ・伝へ聞く、いにしへの賢き御世には憐^{あはれ}みを以て国を治^{をさ}め給ふ。すなはち殿に茅ふきて、軒^{のき}をだにととのへず、煙^{とも}の乏しきを見給ふ時は、限りある^{みつぎもの}貢物をさへゆるるされき。これ、民を恵み、世を助け給ふによりてなり。(方丈記)

また、次例では、「確かに約束したではないか」と、その体験(約束したこと)の確認を迫る発言に、「けり」が用いられている。

- ・限りあらむ道にも後^{おく}れ先立たじと契らせ給ひけるを、さりともうち棄ててはえ行きやらじ。(源・桐壺)〈帝→桐壺更衣〉

地の文の、次のような「き」も説明が難しく、

- ・[桐壺更衣ハ、入内ノ]はじめよりおしなべての上^{うへみやづかへ}宮仕し給ふべき^{きは}際(=低イ身分)にはあらざりき。(源・桐壺)〈物語冒頭部分デ、物語初出ノ内容〉

また、次のように、一文中に、同じ時間が「き」と「けり」の双方で表現された例も

ある。

・[僧都ハ] 初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。(源・若紫) <地の文>

次例では、同じような神話的伝承に「き」も「けり」も用いている(後代の例だが)。

・わたつ海の波かき分けて現れし武鷲尊(=^{たけうのみこと}鷲草葺不合尊)幾代経ぬらん(続後撰 578)

・常世なる鷄の^{とり}声にぞ岩戸閉じ光なき世は明けはじめける(続後撰 579)

150 頁「5.5.3 キ形の意味」の次に、節を新設する。

5.5.3' 認識の過去(新設)

次のような過去表現を「認識の過去」という。

(1) 琵琶湖はどうだった？—大きかった。

(2) 大将(=仲忠)、「さて[いぬ宮ヲ]いかが御覧ぜし。憎げにや侍りし」。宮、「否、いとうつくしかりき。…」とのたまへば(うつほ・蔵開下)

同頁「5.5.4 過去の時点における過去」に類例を追加し、

・わくらばにとほれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき(新古今 1686)

この後に、節を新設する。

5.5.4' 未来の時点における現在(新設)

未来の時点からみた現在は、キ形で表現される。

(1) 行く末も今宵の月を思ひ出でて「さやけかりき」と人に語らん(続後撰 336)

(2) [源氏ノ胤ガ絶エルノハ]二三年をも過ごし給はじ。「幼かりしかども、乙若が船岡にてよく言ひしものを」と、汝等も思ひ合はせんずるぞとよ。…^{たちま}忽ちに源氏の世絶えなんことこそ口惜しけれ。(保元・古活字本) <処刑サレル 13 歳ノ乙若ノ詞>

未来の時点からみた現在の事態の推量は、「けむ」で表現される。

(3) 「[戦ニ負ケテ、オ前ノ]頸切らん時は、何しにかやうのこと思ひ企てけんと思し召さんずるぞ、判官」とぞ言はれける。(承久記)

[出典追加] 愚秘抄②鎌倉後期③日本歌学大系 4